

柔道部

坂田 早苗, 佐藤 展将

千葉大学医学部柔道部について（初期）

昭和31年坂田・石川・太田・紅露らが千葉大学医学部・柔道同好会を立ち上げた。

昭和33年千葉大学医学部・柔道部として活動をはじめた。

部長 川喜田愛朗 細菌学教授（柔道2段）

師範 山口宏 千葉大学柔道師範兼千葉県警察
柔道師範

斎藤新一郎 医学部教務課・事務係長

キャプテン 坂田早苗

部員 太田幸吉, 紅露恒男, 三橋稔, 河野信夫, 戸井道夫, 大川治夫, 岡田信道, 吉野明昭, 長尾孝一, 外間孝雄ら

その後34入学の畔田, 中田が入部し, 35入学の深尾, 鈴木(守), 重松, 万本, 山口, 貝田が入部した。36入学組は中村雅一, 一人だけであった。キャプテンは第一代坂田, 二代太田, 三代戸井, 四代外間, 五代中田が就任してリーダーとなり活動した。

その後, 深尾, 中村, 鎌田, 志村, 吉野, 佐藤(展)らがキャプテンを務めた。上記の何人かは全学の千葉大学柔道部のレギュラーとして活躍しております。

旧制度では千葉医科大学柔道部として対校リーグ戦をしていたようです。そして忘れてはならない猛者として市川平三郎・放射線科助教授（後に築地がんセンター院長）鈴木隆之・解剖学助教授（鈴木整形外科院長）, 井出源四郎学長（第二代柔道部長）岡田藤助・千葉結核療養所院長, 会沢太沖・千葉東病院院長, 漢方薬の藤平健院長, 六本木の羽鳥弘院長, 宇都宮の水沼外科水沼三郎院長らをあげることができる。

新制の柔道部は“医学部柔道部だから, 勉学をすべし”と勉強第一をモットーにし, 柔道の練習で体をぶつけあいながら“粘りのド根性や柔道魂・体力”を養いました。

そのためか, 大川筑波大学小児外科教授, 長尾帝京大学病理学教授, 中田富山医科大学泌尿器科教授, 深尾筑波大学外科教授, 重松信州大学病理学教授, 鈴木群馬大学寄生虫学教授（後に群馬大学学

長）, 田邊政裕千葉大学卒後生涯医学臨床研修所教授, 若いところでは丸山浩自治医科大学教授が誕生しております。

変わったところでは, 昭和39年入学の唐沢祥人が東京都医師会長になって活躍し, 更にその後に日本医師会長となり, 柔道で会得をした“粘りや寝技”で政治家とわたりあっております。

まだ, 私が知らないところで活躍している後輩も枚挙に暇がないぐらい沢山おられるようです。

平成21年現在, 柔道部は低迷しているが, 昭和40年前後には東医体・柔道部門で連続優勝をし, 全医体でも優勝し日本一となった記憶はなつかしい思い出である。

佐藤展将先生をはじめ後輩各位が時々, 柔道場に足を運び現役部員の指導をされたり, また, 精神的にも, 経済的にも現役部員を励まし, 協力をされている後輩が沢山おられるように聞いております。

（さかた さんえ）

昭和45年入学の部員からそうそうたる有段者, 経験者がそろい, 学四吉野, 44年入学の志村, 田沢に加えて轟, 渡辺, 西林, 鈴木が昭和41年に東医体四連覇中の岩手医大に挑戦し, 東京オリンピック候補選手であった荒選手以下の強敵を決勝戦で破り, 外間, 深尾をはじめとする諸先輩の悲願であった東医体優勝を果たし, その後三連覇し全盛期と呼ばれました。（写真1）

昭和42年の秋に西医体柔道部門優勝校の京都府立医大を相手に東西対抗戦がはじめて行われ京都に遠征し, 東京医大, 金沢大学を加えての総当たり戦に勝ち抜き, 初優勝を勝ち取りました。（写真2）

伝統的な行事として, 西医体の有力校金沢大学との定期戦が隔年の春に千葉と金沢で交互に行われ, 親睦を深めてきました。（写真3）

さらに千葉大, 東大, 医歯大, 横市大との四大学戦も年二回定期的に交流戦を回り持ちで行い, 技の研鑽と親睦を深めてきました。（写真4）

千葉大の全盛期を担った学年が卒業後は, 残念ながら大会のたびに優勝カップを返還するのが後輩の役目でした。（写真5）は昭和47年の岩手医大主管



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

の東医体に出場した選手達ですが、厳しさが感じられません。

昭和57年福島医大主催の東医体において強豪群馬大、東海大を破り決勝では慈恵医大に勝ち久々に千葉が優勝。メンバーは百武衆一、竹本大直、木下弘壽、石島秀紀、和田研の精銳でした。

平成になってからは、入部者が減少し毎年数人という状態が続いています。

東医体柔道部門に5人選手を揃えるのも難しく、普段の稽古日も参加者が数人とかつての勢いはありませんが、毎年有段者は入学しており道場も学生寮前に立派に新築されましたので、これからも現役学生と先輩OBが一体となって再び柔道部の伝統を盛り上げたく思います。

(さとう のぶまさ)